ギリシャにおけるキリスト教受容－キリスト教成立初期にみる－

恵泉女学園大學シンポジウム「キリスト教とギリシャ文化」メモ

講師　川　島　重　成

2006 年 5 月 20 日

文責　美術散歩 管理人 とら

1．　**異教文化の敗北？**・・・ローマ時代以降、キリスト教が西欧文化の中心となるが、「ギリシャにおいても古代ギリシャ文化は異教文化としてキリスト教に敗北してしまったという単純な図式でよいのであろうか」という疑問について考察してみたい。

2．　**アウグストゥス時代におけるイエスの誕生**・・・イエス・キリストがユダヤで生まれたのは**ヘロデ大王**の時代(37-4BC)である。現在では歴史を AD (anno Domini）と BC（before Christ）に分けているが、実際にキリストが生まれたのは BC4 年とされている。これは 27BC-14AD の皇帝**アウグストゥス**（Gaius Julius Caesar Octavianus August）の統治時代である。この頃ローマには一旦平和が戻っていた。これを **Pax Romana** と呼ぶ。最近アメリカの一国支配下に平和が維持されている状況を **Pax Americana** ということがあるのはこのアナロジーである。ルカによる福音書第二章によると、全世界の人口調査をせよとの勅令がアウグストゥス皇帝から出された。ダビデの家系であるヨセフは、身重の許婚の妻マリヤとともにベツレヘムというダビデの町に上っていったのは、この登録をするためだった。この時にイエスが生まれたのである。

3．　**新約聖書の史的背景としてのギリシャ文化圏**・・・395 年にローマ帝国が東西に分裂するように、東地中海世界のギリシャ語文化圏と西のラテン語文化圏は分かれて存在していた。ヨハネによる福音書第十九条は、イエス磔刑時の罪状書はヘブル・ローマ・ギリシャの 3 カ国語で書かれていたとしている。また、旧約聖書はヘブライ語であるが、新約聖書はギリシャ語で記されていた。キリスト教の伝道を行ったパウロはユダヤ人であるがギリシャ語を話していた。このような「散らされた」（**ディアスポラ**の）ユダヤ人は**ヘレニスト**と呼ばれている。さらに重要な事として、ギリシャ語は現在も生きた言葉として話されているのである。BC4 世紀のアレキサンダー大王の東征に伴い、マケドニアに及んでいたギリシャ文化が東方に拡大し、それまで使用されていた方言が共通語の**コイネー・ギリシャ語**に変わっていった。事実、アレキサンドリアで翻訳された旧約聖書（セプトゥアギンタ；70 人聖書）はこのコイネー・ギリシャ語に翻訳されているのである。

4．　**パウロのアレオパゴス演説**・・・使徒行伝第十七章には、パウロが伝道のためアテネに赴いた際、アレオパゴスの評議所で演説を行ったことが記されている。このころアテネでは偶像崇拝が盛んであったが、パウロは「知られない神に」と刻まれた祭壇があるのに気づき、その神がキリスト教の全能の神であるという演説を行ったのである。脱線するが、実際に書かれていたのは「知られない神に」ではなく「知られない神々に」だったいう話も残っている。しかし、キリストの復活の話を聞くと、アテネの人の多くはパウロを信用しなくなってしまったが、後にアテネの守護聖人となったアレオパゴス裁判人のデオヌシオなど一部のものはこの話を信じたとのことである。

5．　**「ギリシャ」は「非キリスト西洋」の代名詞？**・・・古代ギリシ文化はキリスト教の存立以前から存在しているものであり、ギリシャ自体はキリスト教的である。慣習的に「西洋」とはイタリア以西を指すものであって、東地中海風土のギリシャは決して西洋の代表ではないことにも注意する必要がある。したがって、ギリシャ文化→ローマ文化という構図は成り立たない。

6．　**ギリシャとキリスト教の構造的対応**・・・ギリシャ文化すなわち古代**ヒューマニズム**は人間的なものに強い関心を示していたが、それだけでなく人間すなわち**ヒューマニズムを超えるもの**への指向もあり、その両者が緊張関係にあったともいえる。これに対してキリスト教はヒューマニズムを超えるものとして開かれてきたのである。

7．　**ギリシャのキリスト教受容の要因**・・・マケドニアのアレキサンダー大王の東征は、ギリシャ本土のポリス文化の崩壊をもたらし、東方も含めた共通文化としてのヘレニズムが誕生した。またギリシャでは、自分の知らない神が存在する不安や**ドドネの神託**において「どの神に訴えたらよいか教えてくれ」とゼウスに向って聞いているような多神教の問題点に起因して、5 世紀にはギリシャ文化自体が変容してきていた。このような状況下においてキリスト教が受容されていったものと考えられる。

8．　**エウリピデス悲劇の特質**・・・古典劇作家のうち、オイディプスのような英雄を書いたソフォクレスやアイスキュロスと異なり、エウリピデスはゼウスをはじめとするオリンポスの神々を信ぜず、英雄を書くこともしなかった。その意味でエウリピデスは預言者の役割を果たしたといえる。その代表例は「**メーディア**」である。彼女は夫の裏切りにあって息子を殺害しているのであるが、エウリピデスは彼女をして女性の惨めさ、不幸さについて具体的に「わたくしは一度お産するくらいなら三度戦争に出ることも厭いません」とまで語らせている。